慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	共和党穏健派の思想と動向：一九五二年の予備選挙を中心として
Sub Title	The ascendancy of moderate republicans in the fight for 1952 republican presidential nomination
Author	西川, 賢(Nishikawa, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.7 (2011. 7) ,p.33- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110728-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共和党穏健派の思想と動向

――一九五二年の予備選挙を中心として――

西川　賢

一　はじめに
二　共和党をとりまく環境と共和党内部の亀裂
三　アイゼンハワーの政治姿勢と政治信条
四　アイゼンハワー擁立運動
五　穏健派の分裂とアイゼンハワーの出馬
六　結論

一　はじめに

アメリカにおける「第五次政党制」（一九三二～一九六八年）は圧倒的に民主党優位の政党制であった。すなわち一九三二年から一九六八年までの一〇回の大統領選挙のうち七回を民主党が制し、議会においても第七三議会（一九三三年三月～一九三五年一月）から第九〇議会（一九六七年一月～一九六九年一月）まで民主党は二つの議会を

除いて一貫して多数党であり続けた（第八〇議会、第八三議会のみ共和党多数）。第五次政党制の三六年間のうち二六年間は民主党の統一政府が実現しており、まさに民主党は支配政党としての優位を築いていた。[1] また一九三〇年代に民主党のフランクリン・ローズヴェルト（Franklin D. Roosevelt）がニューディール政策を実施して以降、その背後に存在したリベラリズムが自明の公共哲学としてアメリカ国民に受け入れられており（「リベラル・コンセンサス」）[2]、政党支持（Party Identification）の面でも民主党の優位は顕著であり、一九三〇年代から一九七〇年代後半に至るまで、民主党は五〇年近くにわたって政党支持の面で共和党を大きく凌駕し続けてきた。[3]

このような圧倒的に民主党が優位であった第五次政党制下において、一九五二年から一九六〇年までは例外的に共和党が政権を握ったインタールード的時期であった。一九五二年の大統領選挙でドワイト・アイゼンハワーが大統領に当選し、共和党は二〇年ぶりに民主党からホワイト・ハウスを奪還することに成功した。ルイス・グールドも指摘するように、共和党の歴史のなかにおけるアイゼンハワー政権の正当な評価や位置づけを見出すことは容易ではない。典型的なアイゼンハワー政権の位置づけとして、アイゼンハワー在職中から既に「アイゼンハワー政権は共和党におけるニューディール政策の弁護人（Apologist）」であったという評価が投げかけられてきた。[4]

この点に関して、アイゼンハワーの同時代人によるアイゼンハワー評を幾つか挙げるならば、アイゼンハワーが共和党の大統領候補に指名されたとき反ニューディールで知られる共和党保守派の重鎮ジョン・ブリッカー上院議員は「アイゼンハワーが共和党の大統領候補に指名されたことは人生最大の屈辱」であると語った。[5] 同様に共和党保守派でアメリカの保守主義の歴史を研究するリー・エドワーズもアイゼンハワー政権は「ニューディールの二番煎じ」にすぎなかったと批判した。[6]

これとは逆に、民主党の側からアイゼンハワーはしばしば「リベラル」との評価すら受け、例えばトルーマン

大統領がアイゼンハワーを自らの後継にしようと民主党からの出馬を打診したというエピソードはよく知られているし[7]、一九五〇年代のアメリカで最もリベラルな団体の一つであった「民主的行動を目指すアメリカ人」（Americans for Democratic Action）もアイゼンハワーが大統領に当選したときニューディール・リベラリズムを理解する人物として評価し、リベラル勢力にとってプラスであると述べたこともある[8]。

このようなアイゼンハワーに対するイメージは後世の研究者による評価とも一致していると考えられる。例えばスティーブン・アンブローズは「ニューディール政策一般に関して、アイゼンハワーはこれに完璧に同調していた」と指摘している[9]。スティーブ・ワグナーも、アイゼンハワーが教育や住宅などの分野でニューディール政策を継続、ないし場合によっては拡張する傾向すら持っていたと論じている[10]。

だが、デヴィッド・スティベンはこの点に若干の留保をつけている。スティベンはその著作において、アイゼンハワーのスピーチ・ライターであり、一九五四年から一九五六年にかけてアイゼンハワー政権の労働次官も務めたアーサー・ラーソンの思想を分析することを通じて、アイゼンハワー政権における穏健主義の特質を描き出そうと試みている[11]。ラーソンはしばしばアイゼンハワー政権の共和党穏健主義に思想的基礎を与えた人物として言及される。スティベンはラーソンが中心となって形成されたアイゼンハワー政権期の社会保障政策を例に取り、それが国家と市民社会の間、労使間、中央地方間において巧みに均衡を図り、急激な変化と停滞の双方を忌避し、漸進的変革を志向する性質をもつものであったことを指摘する。すなわち、アイゼンハワーを単純にニューディール政策の共和党における追従者と解するのは一面的理解であり、アイゼンハワーはニューディール政策を容認しつつも、そこに完全に同調することなく、ある程度の距離を保ち続けたと見る。この点で、まさにアイゼンハワーは「穏健な」政治姿勢の持ち主であったと見るべきではないかというのがスティベンの見解であると思われる。

以上のスティベンの見解はアイゼンハワーの政治姿勢の実像に、よりリアルに迫っているといえるのではないだろうか。というのも、詳しくは本論に譲るが、アイゼンハワーの政治信条は実際のところ非常に微妙なスタンスに拠って立つものであり、単なるニューディール政策の追従者と割り切りがたい側面があったからである。もっとも、以上の視点からのアイゼンハワーの穏健主義の特質解明については別の角度から更なる議論の余地がある。エイミー・ガットマンらが指摘するように、民主主義は統治においては合一性、選挙においては差異を生み出す。その理由は選挙において候補者は他者との間に差異を生み出すことで優位に立つ必要があり、統治においては対立する勢力との間にも妥協点を見出すことで合意形成を円滑に行う必要があるからである。[12] スティベンは主に統治思想の面に注目することで、アイゼンハワー政権の穏健主義に関する一つの側面を描き出すことに成功しているが、選挙過程に全くといっていいほど注目していない。そこで、本論文では一九五二年の大統領予備選挙に注目することで、スティベンとは異なる視点からアイゼンハワーの穏健主義の特質を描き出すものである。

二　共和党をとりまく環境と共和党内部の亀裂

既に述べたように、民主党優位でリベラル・コンセンサスが存在した第五次政党制の下、野党の地位に甘んじていた共和党内部では一九三〇年代半ばまでは中西部を拠点とする保守派と西部を主な拠点とする革新派の二派が併存する状況であった。前者が自由放任を重視し、ニューディールを否定的に見て徹底的に小さな政府に回帰することを主張したのに対して、後者は国内政策ではニューディールを容認し、ローズヴェルト政権をその初期には強く支持してきた。しかし、革新派は外交面においては孤立主義の考え方を強く持ち、一九三〇年代後半以降はローズヴェルト政権への批判を次第に強めるに至った。一九三六年の大統領選挙には共和党西部革新派を代

表して、ウィリアム・ボラー上院議員が出馬した。ボラーは反リンチ法の早期制定やアフリカ系の権利擁護など人種マイノリティの権利保障などの争点を掲げたものの、予備選挙で敗れ去っている。[13]

他方、共和党中西部保守派が押し立てたアルフ・ランドン知事は元々比較的穏健な政治姿勢の持ち主であったが、一九三六年の大統領選挙においては保守化戦略を打ち出して戦った。[14] しかし、ランドンはローズヴェルト政権の赤字財政や同政権が企業自由体制を妨げている点などを争点に掲げたものの、本選挙で一般有権者票の三六・五%、わずかに八名の選挙人を獲得したのみで、歴史的な大敗を喫した。かくして一九三六年の選挙を境に西部共和党革新派は党内での影響力を失い、中西部を拠点とする共和党保守派もランドンの敗北によって党内での存在感を低下させ、共和党内の勢力図は一変しつつあった。すなわち、それらの勢力にかわって、東部エスタブリッシュメントとも呼ばれる北東部を地盤とする穏健派の一団が共和党内で影響力を増していったのである。

共和党全国委員会の会合記録などをみると、この時期の共和党指導部は共和党にはニューディールに対抗しうる有効な戦略が欠けており、まずはそれを模索する必要があると考えていたことがわかる。また、彼らはそのような戦略に沿って共和党を一つにまとめ上げられるだけの求心力を持つ強力な指導者が必要であるとも考えていた。[15] 共和党にとっての袋小路状態を打開すべく、一九四〇年の大統領選挙で共和党東部穏健派はウェンデル・ウィルキーを擁立した。[16] ウィルキーは落選したものの、続く一九四四年と一九四八年の大統領選挙でも同じく東部穏健派のトマス・デューイ（ニューヨーク州知事）が共和党の大統領候補に指名された。ウィルキーやデューイはともに国際主義者として知られ、内政においても社会保障や失業救済の拡充、あるいは労働立法や農産物価格の支持などニューディール政策の根幹部分を積極的に容認する姿勢をみせた。

すなわち、共和党穏健派はケインズ型経済政策を容認し、社会保障をはじめ政府による社会経済領域への介入をかなりの程度まで認める傾向が強かった。また、穏健派は必ずしも労組やマイノリティ・グループに対して敵

対的ではなく、極端な暴力行為などを政治目標として追求したりしない限りにおいて、労組が労働者にもたらす利益とその意義を認めていた。[17]

さらに、カリフォルニア州においても革新派とは異なる新たな共和党の一派が台頭しつつあった。これら新たにカリフォルニア州において台頭した一派も保守派とは一線を画する穏健で中道的な色彩の強い勢力として知られた。同派を率いるカリフォルニア州のアール・ウォーレン知事は、一九四八年にはデューイの副大統領候補を務めたことでも知られており、共和党穏健派を自認する有力な政治家の一人であった。ウォーレンは社会保障や労働者の権利擁護など、やはりニューディール政策の根幹的理念を積極的に受容する人物であり、国連重視・反孤立主義の国際主義者としてその名を知られていた。[18]

以上の共和党穏健派は共和党保守派を「恐竜」などと呼び、保守派は「時計の針を元に戻す」ことにしか関心がないと批判していた。[19] 穏健派のある共和党議員は保守派の政治信条に「まったくもって同意しかねる」と述べていた。[20] その人物は以下のような記述を残している。[21]

> 国民は、共和党員とは旧ブルボン王朝の如く「昔を忘れず、何も学ばない」人々だと思っています。我々はあたかも国民に向かって、「今現在の国民の意志がどうあろうと、我々共和党は今までどおりの政治を提供します。タフト・ハートレー法を守ることがわれわれの仕事です」と言っているようなものです。率直に言って、私はそのような〔保守的〕姿勢は誤りだと確信しています。また、そのような姿勢を共和党がとり続ける限り、勝機があっても共和党が選挙で勝つことはないだろうと思います。

以上からも窺われるように、共和党穏健派は共和党が保守に傾倒した戦略をとることは無党派層や民主党浮動

層からの政治的支持の調達を困難なものにすると考えた。[22]

デューイは一九四〇年代初頭からハーバート・フーヴァー元大統領など党の重鎮と共和党の再編についての意見交換を重ねた末、一九五二年の大統領選挙において共和党は社会民主主義的な政治理念を取り入れ、「舵を左に切る」ことで共和党のみならず民主党浮動層や無党派層をもその支持基盤に取り込み再編を遂げるべきであるという結論に達した。[23] さらに一九五二年の大統領選挙に臨んで、デューイたちはギャラップをはじめとする世論調査を熱心に分析していた。デューイは穏健派の共和党大統領候補ならば選挙で無党派層や民主党の浮動層を取り込んで民主党に勝利する可能性が残されているが、保守派のタフトでは無党派層や民主党の浮動票獲得は絶望的であり、一九三六年のランドン同様惨敗を喫するに相違ないものと考えていた。[24]

そこでデューイが重視したのは、民主党の圧倒的優勢の前に苦戦を強いられる共和党の不利を覆すだけの全国的知名度を持つ穏健な候補者を探し出し、その人物を大統領選挙に擁立することであった。デューイは極秘裏に全国の共和党員を対象に調査を進め、[25] 戦勝将軍であるドワイト・アイゼンハワーの人気が高いことを見てとり、彼こそ一九五二年における共和党大統領候補に最も相応しい人物に他ならないという結論に達した。[26] デューイは共和党・民主党、そして無党派層にまで及ぶアイゼンハワーの国民的人気や彼の人柄、指導力といった個人的魅力を重視し、アイゼンハワーをいわば「利用」することで大統領選挙を巧みに勝ち抜くことを考えるようになった。[27]

以上からも明らかなように、穏健派はニューディール政策を柔軟に取り入れることで左に舵を切って無党派層や民主党不動層からの支持獲得を目指すのが合理的戦略であり、そのためにアイゼンハワーという国民的人気を博する人物を担ぎ出す必要があると考えていた。

しかし、以上のような穏健派の打ち出した「左旋回路線」に対しては、しばしば保守派から「ニューディール

の二番煎じ」（“me-tooism”）にすぎないという批判が投げかけられた。保守派の穏健派に対する拒絶反応は凄まじく、保守派はウィルキーやデューイは民主党のニューディール政策に追従して大きな政府・介入主義を支持し、個人主義や企業の自由といった徳目をないがしろにしていると強く非難した。[28] 保守派は、共和党はあくまで民主党と異なる「共和党らしさ」（Republican Principle）を真摯に追求するべきであると考えていた。[29] 保守派は自由企業体制と個人主義、ならびに州・地方政府の権限を重視し、連邦政府によるケインズ型経済政策を否定し、均衡予算と減税を重視した。また、社会保障など政府による社会経済領域への介入の一切を連邦政府による過剰な権限拡大と見て、これを「社会主義」と呼び忌避する傾向が強かった。[30] またこうした大きな政府による弊害を助長するとして労組やマイノリティ・グループを嫌悪する傾向も強く、頑強な反共姿勢をとっていた点も特徴的である。七人もの大統領を輩出した中西部の名門州オハイオ選出のロバート・タフト上院議員は「ミスター・リパブリカン」との異名をとり、まさに保守派を代表する人物であった。[31]

タフトはニューディール政策の一切を「計画経済」であるとして否定する考えを持ち、反ニューディールの旗手を公言してはばからなかった。[32] タフトは、ニューディールを容認し「共和党ならば同じニューディール政策をよりうまくやれる」と主張する共和党穏健派の政治姿勢には限界があるとする批判を繰り返し、[33] 共和党はニューディールにかわるオルタナティブを確立するべきであると主張していた。[34] タフトは第二次世界大戦期に武器貸与法や選抜徴兵制度に反対したことでも知られ、さらに戦後もブレトン・ウッズ協定や北大西洋条約などに悉く反対するなど、孤立主義的な外交思考の持ち主としても知られた。[35] デューイ、ハロルド・スタッセン、あるいはアール・ウォーレンといった共和党穏健派の多くが国内政策の面ではニューディールを容認し、外交面では国際主義的側面を有していたのとは好対照である。[36] 保守派の思惑は「外交においては国際主義に反対し、内政においてはニューディールに反対することで独自色を出す」ことにあった。[37] タフトは以下のように述べている。[38]

一八九六年以来、共和党は保守を体現する政党である……死に行く政党とはその創設の理念を忘れた政党である。偉大な理念を有する政党のみが生き残るのだ……共和党の哲学は自由を守ることだ……政府権力の肥大は社会統制をもたらし、自由を脅かす。

タフトは早くから一九五二年の大統領選挙に立候補する意思を公に示していた。タフトを支持していたのは地域でいえば孤立主義的な中西部諸州、社会階層でいえば自由企業体制を重視する銀行家や企業家などの富裕層であり、また白人が支持者に占める割合も多く、[39]予備選挙中もタフト支持者の中にはアイゼンハワーを「ユダヤ人の子孫」であると呼ばわるネガティブキャンペーンを行うものが出るなど、[40]マイノリティや外国人に対する嫌悪感を強くもっていた点も特徴的である。[41]くわえて、タフト支持者の多くは所謂ニューディール派は民主党のみならず共和党の内部にも存在するとし、「ワシントンのニューディーラーを隅から隅まで民主党・共和党の別なく殲滅する」ことが一九五二年選挙の課題であると考えていた。[42]

これらタフト支持派の大多数は共和党穏健派による「左旋回」を誤った戦略と見ていた。あるタフトの支持者は共和党が幾ら民主党の政策を模倣しても、有権者はイミテーターの共和党ではなくインヴェンターの民主党を選ぶはずだという持論を掲げ、一九四〇年から三回連続で共和党が東部穏健派の指導下で大統領選挙に臨んだことを戦略的失敗と結論づけた。彼等は共和党が左に舵を切ることはかえって従来からの共和党支持者の票を失うリスクを負うものであって、[43]共和党穏健派の左旋回路線にはその点で限界があると考えていた。[44]これら保守派党員の多くは一九五二年の選挙において共和党は保守の大統領候補を擁立し、むしろかえって「舵を右に切る」ことで民主党との間に明確なイデオロギーの線引きを図るべきであると考えていた。[45]あるタフト支持者は以下のよ

うに述べる。[46]

もし共和党〔穏健派〕がアイゼンハワーを擁立して選挙に勝ったとしても、それはただ一回の選挙を勝っただけにすぎない。それは共和党の分岐点で共和党が抱える精神的、道徳的、そして政治的諸問題を棚上げにするということ、すなわち敗北するということだ。もし共和党がタフトで選挙に勝ったとすれば、それは選挙に勝利するのみならず共和党の分岐点で正しい選択をするということだ。

以上からも窺われるように、一九五二年の大統領選挙を目前に、共和党は中西部を基盤とする保守派と北東部を基盤とする穏健派とがイデオロギー的・地域的に対立する状況を抱え込んでいた。共和党の進むべき方向性に関する戦略という面から見れば、保守派が優位政党である民主党に対抗するために共和党をより保守的な方向へとシフトさせ民主党との差異を際立たせる必要があると考えたのに対し、穏健派はニューディールを積極的に容認し、より穏健で中道的な方向へとシフトするのが合理的戦略であると考えていた。

三　アイゼンハワーの政治姿勢と政治信条

では、穏健派が大統領候補に擁立しようと試みていたアイゼンハワーの政治信条はどのようなものであり、アイゼンハワーの支持政党はどの党であったのか。

アイゼンハワーは一九〇九年一九歳のときに当時住んでいたカンザス州ディキンソン郡の青年民主党委員会に招かれて「政治を学ぶもの」（“The Student in Politics”）と題する講演を行っている。この講演の中でアイゼンハ

ワーは共和党に批判的な言及をしており、少なくとも一九〇九年の時点では共和党支持ではなかったものと思われる。ただし二大政党のうちどちらを支持するかは自らの政治信条に関わる重要事項であり慎重に決めなければならないと述べ、民主党を支持していたわけでもない[47]。約半世紀後の一九五一年に至ってもアイゼンハワーの無党派的志向性は変わらなかった。一九五一年の日記に残る記述からは、アイゼンハワーが内心共和党よりであった様子を窺い知ることができるが[48]、共和党支持であった実弟ミルトン・アイゼンハワーに対しても「私がお前と同じ党を支持しているなどと口にしようものなら、どうなることか」と述べるなど[49]、近しい身内にさえも自らの政党支持について言及することをしなかった。このようにアイゼンハワーが一向に自らの政党支持について明確にしようとしなかったため、アイゼンハワー擁立を企てていた共和党の一団は頭を悩ませていた[50]。

以上の事実からも窺われるように、アイゼンハワーは生涯を通じて自らを特定の党派の利害を代表する存在とは考えなかった。同時にアイゼンハワーは政治をビジネスと見る職業政治家を好まず、党派的駆け引きを嫌った[51]。このようなアイゼンハワーの「政治嫌い」については数多くの側近が同様の証言をしているため信用性が高い[52]。バリー・ゴールドウォーターのような共和党内の保守派でアイゼンハワーを批判していたものは、アイゼンハワーの「政治嫌い」を彼の欠点の一つとみていた。ゴールドウォーターはアイゼンハワーの人柄や国民的な人気については評価しつつも、「アイゼンハワーはついぞ政治の何たるかを理解することはなかった。私が思うに、これは一つにはアイゼンハワーが政治に携わった経験が無いことと、彼自身が政治に興味を持たなかったことがその理由であった」と語っている[53]。

このように「政治」を嫌う一方、アイゼンハワーの政治信条は首尾一貫したものとはいい難く、非常に曖昧な性質のものであった。

アイゼンハワーは「『社会福祉』の名のもとに我々は連邦政府により多くの権限を集中している」と政府の肥

大化に対して警鐘を鳴らすなど、ニューディールに対しては否定的な見解も抱いており、一概にニューディール政策の根幹部分を全面的に容認する政治姿勢の持ち主とはいい難い面があった[54]。事実、アイゼンハワーは「私と〔ハーバート・〕フーヴァー氏の間には多くの領域で知的合意が存在するが、ニューディーラーと私の間にはそれほどの知的合意は存在しない」と述べており、自身の政治的信条はニューディール派リベラルよりも共和党保守派のそれにより近いという自己認識を持っていた[55]。アイゼンハワーは性急な変化や進歩からアメリカの政治様式を「保守」しようという思考様式を抱いていた点においてはタフトと余り変わるところはなく、例えばアイゼンハワーもタフトもともに国民皆保険を「社会主義医療」（Socialized Medicine）と揶揄し、その導入に強く反対していた[56]。アイゼンハワーはタフトと会談した際にはタフトが主張する保守的な政策項目を受け入れようとしたこともあったし、連邦政府や労組への過度の権限集中を忌避する傾向は一貫して強く[57]、自由企業体制や個人主義を尊重する点などにおいて、保守的信条の持ち主であったと見るべきであろう[58]。

ただし、同時にアイゼンハワーが社会における個人の自由の確保と個人の能力の発揮を妨げない範囲において、政府が民間団体の手に余る老人年金や疾病保険、失業保険、貧困者救済、あるいは人種や宗教に関わる平等性担保、労働者の権利保護、農業安定化などを目指して社会経済領域に適正に介入することは、もはや不可避かつ必要不可欠であることを理解していた事実にも留意するべきであろう[59]。アイゼンハワーは高度に専門化され産業化の進んだ二〇世紀においては、アメリカの進歩と福祉を達成するためにはニューディール的な政治のあり方はもはや完全には否定しがたく、国民の大多数が信任を与えたものとして自明視せざるを得ないことを率直に認めてもいたのである[60]。

このような考えをアイゼンハワーが抱くようになった一つの契機は、恐らく彼が大恐慌直後のアメリカにおける未曾有の社会的危機を目の当たりにしたことによるものであろう。アイゼンハワーは大恐慌直後のアメリカを

覆いつくしていた悲観主義、あるいは絶望を目の当たりにして、これを克服するためには、指導力のある政治家の手に権限を集中することしか術はないと判断したのである。[61] 一九三二年の大統領選挙でフランクリン・ローズヴェルトが勝利したとき、アイゼンハワーが「自分はどの政党も特に支持していないが、民主党が勝利したのは素晴らしい」と述べ、[62] ローズヴェルトの大統領就任に接して「もっと彼に権限を集中せよ！」と日記に記したこと、[63] あるいは緊急時に必要不可欠と判断したニューディールの政策プログラムに支持を与えたこと、これらはいずれもそうした判断に基づくものと考えられる。[64] タフトのような保守派はニューディールの政策プログラムの多くに当初から極めて懐疑的であったが、この点がタフトのような保守派とアイゼンハワーとの相違点というべきではないだろうか。

以上からも分かるように、アイゼンハワーは教条的な保守主義者ではなく、どちらかといえば基本的なスタンスは保守的ながらも、現実的で柔軟な政治姿勢の持ち主であったといえよう。[65] このようなアイゼンハワーの政治姿勢は見方によってはリベラル寄りに解することも可能であり、実際のところ民主党にとっても比較的受け入れやすいものであった。アイゼンハワーは一九五一年一一月にはトルーマン大統領から民主党の大統領候補として出馬することを要請されたが、[66] それはトルーマンが以上に述べたアイゼンハワーの政治姿勢を好ましく思った結果であることはいうまでもない。[67]

アイゼンハワーは自らの政治的立場を「現代的共和党主義」(Modern Republicanism)、もしくは単に「中道」(Middle Way) と形容していた。[68] その考え方はG・W・ブッシュ政権初期にみられた「思いやりのある保守主義」を想起させる。だが、「思いやりのある保守主義」は福祉受給者に自立・勤労を促すと同時に、各種の福祉サーヴィスを中間結社・企業・地域社会・家族・個人を通じた人々の自発的な活動に任せることで、できる限り政府の介入に頼らずに道徳的社会秩序を形成し貧困を解決していこうとするもので、あくまで福祉国家・大きな政府

に対する代案であり、小さな政府への回帰という色彩が強かった。[69] これに対して、アイゼンハワーの現代的共和党主義は小さな政府を理想としつつも、そこにアメリカの進歩や福祉を達成するために柔軟にニューディール政策を取り入れていく修正主義的なニュアンスが強かった点に留意すべきである。

四　アイゼンハワー擁立運動

穏健派にとって最大の障害であったのは、アイゼンハワー本人が政界進出を躊躇し続け、大統領選挙への出馬に気乗りがしない様子であることであった。[70] アイゼンハワーは一九四八年の時点では大統領選挙に出る野心はないことを言明していた。[71] これに対して、デューイは一九四九年にアイゼンハワーに出馬を打診し、出馬するなら全面的協力を惜しまないと申し出ている。[72] だが、アイゼンハワーは大統領選挙出馬に対して「政党政治に巻き込まれるのは御免だ。まるで五〇歳までカトリックだった男が急にプロテスタントになれといわれたようなものだ」と述べるなど、慎重な姿勢を崩そうとしなかった。[73] ここでアイゼンハワーが出馬をためらった理由は、軍人として既に国民的名声を博していること、政治に興味を抱いていなかったこと、そして高齢であることであった。[74]

それでもなお穏健派はアイゼンハワーの擁立を諦めず、「タフトはミスター・リパブリカンと呼ばれているが、アイゼンハワーはミスター・アメリカンである……アイゼンハワーに出馬が自らの義務であることを自覚させれば、アイゼンハワーの擁立は可能」と判断していた。[75]

デューイは大統領選挙に二度出馬した際に築き上げた人脈を一九五二年に至っても保持し続けており、全米の共和党有力者と通じて共和党組織をまとめ上げる役割を果していた。[76] このコネクションを利用して、一九五一年の秋ごろデューイはルシアス・クレイやハバート・ブラウネル、あるいはJ・ラッセル・スプラーグといった旧

知の人々を集めて、アイゼンハワーを大統領候補に担ぎ上げるための組織を正式に発足させた。[77]

このデューイ・グループに平行して、中西部においてフランク・カールソン上院議員とハリー・ダービー知事が、そしてペンシルヴェニア州でジェームズ・ダフ議員とヒュー・スコット下院議員が、それぞれアイゼンハワーを擁立しようとする運動を別個に軌道に乗せつつあった。[78] これらグループはニューヨークで会合を持ち、一つのグループとして統合された。[79] このグループに徐々にヘンリー・カボット・ロッジ・ジュニア上院議員、シャーマン・アダムス、フレッド・シートン、ハワード・スミス議員、シンクレア・ウィークス、ポール・ホフマン、バラック・マッティングリー、トマス・スティーブンスといった共和党内部の他の穏健派が合流しつつあった。このグループは共和党内部の穏健派を団結させ、なおかつ当選に必要なだけの民主党員や無党派層を取り込める人物はアイゼンハワーをおいて他にないという見解で一致していた。当初、マッティングリーがグループをまとめる役割を果たすはずであったが、彼がダフ議員と折り合いが悪かったため、古くからのアイゼンハワーの友人であり、[80] 個人的に彼と親しかったロッジがグループのまとめ役に推された。[81]

アイゼンハワー・グループは一九五一年に複数回にわたってアイゼンハワーに出馬を要請するため、パリを訪れている。一九五一年五月にはリチャード・ニクソンが、[82] 続いて九月にはロッジ、一二月にはハロルド・スタッセンがアイゼンハワーを説得するためパリに向かった。

アイゼンハワーの説得に向かったロッジは共和党には敗北主義と日和見主義が蔓延しており、このままの状況が続けば、いずれ共和党は破綻するとまでアイゼンハワーに告げた。あわせて、共和党をそのような窮状から救い出せるのはアイゼンハワーをおいて他にはおらず、それはアイゼンハワーにとっての義務であると述べ、出馬宣言するように強く迫った。アイゼンハワーはこの出馬要請に対して言質こそ与えなかったが、代わりに共和党の北部穏健派と民主党の南部穏健派を一つの政党にまとめ上げることは可能だと思うか、という質問をロッジに

投げかけた。質問に対してロッジは返答せず、以下のように切り返した。[83]

> 決断が非常に難しいことはよくわかります……これには政治的賭けが含まれています。しかし、あなたはこれまでの人生においても数多くの賭けをして、それに勝ってきたではありませんか。あなたの人生には数多くの困難がありましたが、それらを全て克服してきたでしょう。

この言葉はアイゼンハワーの心を動かした様子ではあったが、やはりアイゼンハワーは出馬に関する言質を与えることはなかった。その後、ロッジは一九五一年九月四日、再びパリのアイゼンハワーのもとを訪れている。ロッジは民主党による長期政権がこのまま続けば二大政党制は危機を迎えると諄々と説き、まるで「憂国の志士のような熱心さ」と「ブルドッグのようなしつこさ」でアイゼンハワーに大統領選挙に出馬するよう求めた。[84] アイゼンハワーはこの再度の要請にも応じず、自分に大統領になる意思はなく、選挙キャンペーンも一切行うつもりはないと述べた。しかし、アイゼンハワーはロッジたちが自分を大統領にしようと自発的努力を続けるならば、それを邪魔する意思もないとも述べた。[85] このため、アイゼンハワー本人が不在のまま、一九五一年一一月一六日、ロッジたちはコモドア・ホテルの二部屋を借り切ってアイゼンハワーの選挙戦を「見切り発車」させた。ロッジたちがこのような強硬手段に出たのは一一月に入ってタフトの選挙活動が本格化し、デューイやロッジがこれに危機感を抱いたためである。[86] ロッジ選対委員長はテレビでのスポット広告の活用などのメディア対策や各州への遊説計画を立案し、「アイゼンハワー市民連合」と呼ばれる草の根組織の設営や州ごとの情報収集と分析を請け負うなど、アイゼンハワー本人からの出馬宣言のないまま、選挙運動を前進させていった。

五　穏健派の分裂とアイゼンハワーの出馬

一九五一年、パリのアイゼンハワーのもとを訪れた穏健派グループの一人で前ミネソタ州知事のスタッセンによれば、アイゼンハワーはタフトが選挙委員会を準備して各州の共和党委員長やその他の有力者と連携を図りつつある状況を説明されても、自らの出馬について何の言質も与えなかったという。[87] かくしてアイゼンハワーの優柔不断な態度に限界を感じたスタッセンは、一九五二年一月二九日、タフトを阻止するためと称して自らニュー・ハンプシャー州の共和党予備選挙に出馬すると宣言した。[88] アイゼンハワー陣営はスタッセンの立候補はアイゼンハワー支持者を分断し、かえってタフトに漁夫の利を与えるとしてスタッセンに出馬を再考するように促したが、[89] スタッセンは制止を無視した。[90]

スタッセン自身はアイゼンハワーに当てた書簡の中で、自らの立候補はあくまでタフトを阻止するためであると主張し、[91] また後年になってから「自分に勝機はなかった」とも述懐しているが、[92] おそらくスタッセンの本心は別のところにあった。そもそもスタッセンは一九五一年の一月には大統領選挙への出馬を検討していた事実が史料からも確認可能である。この事実からも窺われるように、スタッセンは早くから大統領選挙に打って出る野心を持っていたものと思われる。[93] アイゼンハワーの出馬が大幅に遅れたこともあり、スタッセンはアイゼンハワーとタフトの間で膠着状態が起きることを望むようになった。[94] スタッセンは以下のように状況を分析していた。[95]

二人のフロント・ランナーによってかなりの接戦が繰り広げられているようだ。これは膠着状態（deadlock）になるかもしれない。そうなればわからなくなってくるぞ。

スタッセンはまたニクソンに対してカリフォルニア代議団の支持を自分に振り向けてくれれば副大統領に指名する裏取引を依頼するなどしており[96]、スタッセンの行動はタフトを阻止するためではなく、明らかに個人的野心を満足させるためのものであった。かくしてアイゼンハワーの出馬が遅れたことによって穏健派は足並みを乱すようになり、分裂の危機に瀕しつつあった。

スタッセンの立候補に先駆けて、カリフォルニア派も独自にウォーレンを大統領候補に立てており、タフトからもアイゼンハワーからも距離を置く姿勢を見せていた。一九五二年の大統領選挙に関する限り、ウォーレンの思惑がどこにあったのか、あまり明瞭ではない。ウォーレンは一九五二年の選挙に出馬こそしたものの、カリフォルニアのほかはオハイオとウィスコンシンで若干の選挙活動を行ったのみであった[97]。恐らく、ウォーレンもスタッセン同様アイゼンハワーとタフトが「相打ち」になった場合の「漁夫の利」を狙っていたものと思われる[98]。

このように、アイゼンハワーの出馬が遅れたためにスタッセンは穏健派を割って自ら立候補し、カリフォルニア派も独自の動きを見せるなど、穏健派は足並みを乱しつつあった[99]。この穏健派分裂の危機を危惧したロッジはアダムスに以下のような手紙を書き送った[100]。

> アイゼンハワー将軍と会談したところ、彼は政治の世界に飛び込むつもりはないが、共和党とアメリカ国民を挙げての合意が存在する場合には政界への立候補を考慮することもあり得るといっていました……こういう事情ですので、ニュー・ハンプシャーの共和党員が合衆国大統領として〔アイゼンハワーを〕熱望しているということにして、ドワイト・アイゼンハワーの名前を予備選挙に登録してしまいましょう。

こうしてとうとうアイゼンハワーは本国に不在で、なおかつ本人からの出馬宣言もないまま、ロッジとアダム

スによって一月六日にニュー・ハンプシャー州の共和党予備選挙への出馬が宣言され[101]、三月一一日、本人不在のままニュー・ハンプシャーの予備選挙で勝利した。その一週間後の三月一八日に行われた地元ミネソタの共和党予備選挙でスタッセンが勝利し、続くウィスコンシンの予備選挙ではタフトが二四人の代議員、ウォーレンが六人を獲得した。その後はタフトとアイゼンハワーの間で一進一退の攻防が続き、タフトはネブラスカ、イリノイ、オハイオ、ウェスト・ヴァージニアを獲得し、アイゼンハワーはオレゴンやニュージャージーで勝利を収めていった[102]。この情勢を見たアイゼンハワーは遂に出馬の決意を固め、六月一日付で北大西洋条約機構軍最高司令官の任を辞し、アメリカに帰国した。

こうして出馬の問題はロッジたちの強行策によってクリアできたものの、まだ課題は残されていた。それはアイゼンハワーの政治姿勢を穏健派の望む方向へと誘導するという問題である。すでにタフトに遅れをとっていたために、デューイはロッジにアイゼンハワーがどのような政治姿勢の持ち主かを早急に国民に知らしめる必要があると助言していた[103]。しかし、アイゼンハワー自身が帰国後まもない六月四日に行ったスピーチは、政府の肥大化や政府内の汚職に対する批判、政府による重税への反対などに力点を置くもので、タフトの演説と代わり映えせず保守派を喜ばせるとともに[104]、穏健派を失望させた[105]。それどころか、あたかもアイゼンハワーは「頼りない、年老いた中西部の共和党員のように見えた。まるでロバート・タフトその人を見るかのようだった」という印象すら与えた[106]。

ロッジはアイゼンハワーが「外交面ではよいが……国内政治では共和党保守派の虜となっている」ように見受けられることは「致命的」であると考え、民主党政権を社会主義であるとする批判のトーンを下げ、州権など保守派を想起させる用語を差し控えるよう忠告を与えていた[107]。ロッジはアイゼンハワーにタフトが共和党においてすら多数の支持を集めることに苦心しているのは、タフトが社会保障費の削減など保守に偏向した公約を掲げて

いるからであると説き、アイゼンハワーにはそのような保守的公約から距離を置く立場をとるように勧めた。[108] 先述のように、タフトと会談したアイゼンハワーは保守的な政策項目を受け入れようとするなど、しばしば姿勢にぶれも生じた。ロッジはそのような際にも、以下のように述べてアイゼンハワーを押し止めていた。[109]

タフト議員とニューヨークで会談されたことは選挙広報の点からみて、無難に対応できたとはいえません。「保守派」が「アイゼンハワーを取り込んだ」という誤った印象を与えています……あなたを早くから支持してきた人々の多くは〔民主党の大統領候補である〕スティーブンソン支持に傾きつつあります……選挙を上手に進める秘訣は上院議員だろうと知事だろうと個人を喜ばせることを考えるのではなくて、選挙に勝利することを考えることです。

ロッジは保守的なタフトとの間に溝が深まるほどタフトに反感を有する党内穏健派や民主党の浮動票獲得に有利であると述べ、アイゼンハワーはこの助言に従ってタフトとは異なる穏健派よりの政策を前面に打ち出すようになっていった。[110] 以上からも窺われるように、アイゼンハワーが共和党からの出馬を宣言したこと、そして穏健かつ中立的な政治姿勢を打ち出すようになったのはロッジの貢献によるところが大きい。

ロッジは「共和党は現代的世界観を持つべき」であるとする穏健な政治信条の持ち主であり、[111] アイゼンハワーを共和党の穏健路線を象徴する存在として位置づけようと努めた。[112] ロッジは政治的極端を廃し「中道」に向かうことが今後の共和党のとるべき選択肢であることをアイゼンハワーに繰り返しインプットした。[113] タフトは、アイゼンハワーは本質的には保守的思想の持ち主であり必ず保守化すると期待していたが、最終的に保守派と一体化することがなかったのは、選挙マネージャーを務めたロッジを中心とする穏健派の選挙助言団が「くさび」の役割を果たしたことが大きかったといえよう。[114]

ただし、アイゼンハワーは何ら自らの意思なく穏健派の助言に流されていたわけでもない。アイゼンハワーはロッジに送った書簡の中で「いつも君の助言に導かれているし、これからもそうする」としつつ、「自分の信じることを率直に口にしたいときもある。私の信念が右寄りだとか左寄りだとかいわれることをいちいち気にせねばならないとは思いもよらなかった」と述べ、選挙に勝利することを最優先にした穏健化戦術に抵抗することもあった。[115] かくして、アイゼンハワーは「タフト派による、アイゼンハワーはニューディーラーであるという非難を解毒出来る程度」には保守的スタンスを自律的に保ち続け、アイゼンハワーの政治姿勢が保守派にとっても少なくとも危なげのないものであるとの印象を与えることにも成功したのである。[116]

こうして、アイゼンハワーは民主党にとっても比較的受容可能であるが、決してニューディール・リベラルと同一ではなく、反面共和党の保守派にも受け入れられるほどに保守的であっても、そこから意識的に距離を置くことで保守派にも自己を同一化しないという実に微妙なバランスに拠って立つ政治姿勢を確立することに成功した。

六　結論

本論文が明らかにした歴史的出来事の因果連鎖を順に述べていくと次のようになる。

（一）ニューディール以降の民主党の圧倒的優位の下、一九五二年までに共和党は北東部の指導者層が主導する穏健派と中西部を拠点とする保守派の二つに内部分裂していた。

（二）穏健派はニューディール政策の根幹部分を積極的に容認しており、選挙に勝利するためには共和党が「左に舵を切る」ことが合理的戦略であると考え、選挙に勝ちぬくに相応しい候補としてアイゼンハワーの

擁立を早くから考えていた。これに対してタフトを中心とする共和党保守派はあくまで民主党とのイデオロギー的差異化をはかることに固執し、「右に舵を切る」戦略を主張していた。

（三）しかし、穏健派が擁立を企てていたアイゼンハワー自身は政治から距離を置きたいと考えており、またその政治信念は基本的には小さな政府を理想としつつも、そこにアメリカの進歩や福祉を達成するために柔軟にニューディール政策を取り入れていく修正主義的なニュアンスが強かった。すなわち、アイゼンハワーは教条的な保守主義者ではなく、どちらかといえば基本的なスタンスは保守的ながらも、現実的で柔軟な政治姿勢の持ち主であったといえる。

（四）本人からの明確な立候補への意思表示がないまま、穏健派はアイゼンハワーの選挙戦を開始した。しかし、アイゼンハワー本人の意思が不明確であったことも手伝って穏健派の足並みは揃わず、ウォーレンやスタッセンは穏健派を割って自ら立候補を表明した。これに危機感を強めた穏健派の指導者はアイゼンハワーに無断で彼をニュー・ハンプシャーの予備選挙に投入し、半ば強制的にアイゼンハワーを選挙の最前線に引き出した。

（五）かくしてアイゼンハワーは帰国して選挙に身を投じた。その過程において、結果的にアイゼンハワーの確立した政治姿勢は民主党にとっても比較的受容可能であるが、決してニューディール・リベラルと同一ではなく、反面共和党の保守派にも受け入れられるほどには保守的であっても、そこからも意識的に距離を置くことで保守派にも自己を同一化しないという実に微妙なバランスに拠って立つものとなった。

以上に見たアイゼンハワーの政治姿勢は「妥協可能な党派性」と形容すべきものであり、民主党とも共和党保守派とも一線を画すことで、選挙に勝利するために必要な差異を生み出すものであった。しかし、それは同時に統治において対立する勢力との間での合意形成が不可能となるほどイデオロギー的に分極化した政治姿勢でもな

かった。統治において対立する勢力との間での合意形成が可能な位置を保ちつつ、選挙に勝利するために必要な差異を生み出す――この点こそ、アイゼンハワーの「現代的共和党主義」ないし「中道」の精髄であったのではないだろうか。

また、大統領就任後のアイゼンハワーに課せられた党組織運営上の課題は、文字通り以上の穏健路線を共和党内部に定着させるべく、共和党を改革し管理運営していくことであった。それに関しては別稿を予定しているので、ここでこれ以上の考察を深めることはしない。

（1） Harold W. Stanley and Richard G. Niemi, *Vital Statistics on American Politics, 2007–2008*（Washington, D.C.: CQ Press, 2008）, pp.47–48.

（2） 吉野孝「背景としての政党対立」吉野孝・前嶋和弘編『二〇〇八年アメリカ大統領選挙――オバマの当選は何を意味するのか』（東信堂、二〇〇九年）、四頁、Kenneth Baer, *Reinventing Democrats: The Politics of Liberalism from Regan to Clinton*（Kansas: University Press of Kansas, 2000）, p.12.

（3） Alan I. Abramowitz and Kyle L. Saunders, "Ideological Realignment in the U.S. Electorate," *The Journal of Politics*, Volume 60, Number 3（August 1998）, p.635.

（4） Louis L. Gould, *Grand Old Party: A History of the Republicans*（New York: Random House, 2003）, p.327.

（5） Oral History Interview with Sherman Adams by Charles T. Mossisey, November 21, 1978, *Oral History Collection of the Association of Former Members of Congress*, Box 1, Manuscript Division of Library of Congress, Washington, D.C.（以下 *Oral History Collection of the Association of Former Members of Congress* と略記。）

（6） Lee Edwards, *A Brief History of the American Conservative Movement*（Washington, D.C.: The Heritage Foundation, 2004）, pp.36–45.

（7） Interview with United States Senator Hugh Doggett Scott. Jr., *United States Capitol Historical Society Oral*

History Program, Manuscript Division of Library of Congress, Washington, D.C.

（8） Americans for Democratic Action Newspaper Clippings, December 14, 1952, *Americans for Democratic Action, Southeastern Pennsylvania Chapter Papers,* the Urban Archives, Temple University, Pennsylvania.

（9） Stephen E. Ambrose, *Eisenhower,* Volume 1（New York: Simon and Schuster, 1984）, p.530.

（10） Steven Wagner, *Eisenhower Republicanism: Pursuing the Middle Way*（DeKalb: Northern Illinois University Press, 2006）, pp.3-6.

（11） David L. Stebenne, *Modern Republicanism: Arthur Larson and the Eisenhower Years*（Bloomington: Indiana University Press, 2006）, pp.ix-xi.

（12） Amy Gutman and Dennis Thompson, "The Mindset of Political Compromise," *Perspectives on Politics,* Volume 8, Number 4（December 2010）, pp.1130-1137.

（13） Gifford Pinchot to Graham R. Hard, February 3, 1936, *Gifford Pinchot Papers,* Box 1328, Manuscript Division of Library of Congress, Washington, D.C.; William E. Borah to Pinchot, January 22, 1936, *William E. Borah Papers,* Box 878, Manuscript Division of Library of Congress, Washington, D.C.

（14） Louis L. Gould, *Grand Old Party: A History of the Republicans*（New York: Random House, 2003）, p.272.

（15） "Eastern Regional Conference of the RNC and Republican State Chairman and Vice Chairman Meeting, October 1, 1951," *Papers of Republican Party Part 1: Meetings of the Republican National Committee 1911-1980,* Series A, Reel 10.

（16） Gould, *Grand Old Party: A History of the Republicans,* pp.282-283.

（17） Nicol C. Rae, *The Decline and Fall of the Liberal Republicans from 1952 to the Present*（New York: Oxford University Press, 1989）, pp.3-6, 43; David Stebenne, "The American 'Middle Way': Moderate Conservatism in the Postwar Period," Paper presented to the Annual Meeting of the Historical Society, Chapel Hill, North Carolina, June 3, 2006, pp.1-8.

（18） Governor Earl Warren Information Brochure, 1952, *Earl Warren Papers,* F3640: 655, California State Archives,

Sacramento, California.（以下 *Warren Papers* と略記。）

(19) Memorandum for the President, undated, *Henry Cabot Lodge, Jr., Papers*, Paper 2, Reel 15, Massachusetts Historical Society, Boston, Massachusetts.（以下 *Lodge Papers* と略記。）

(20) Lodge to Samuel Hoberman, September 14, 1942, *Lodge Papers*, Paper 2, Reel 15.

(21) Lodge to Taft, December 20, 1948, *Lodge Papers*, Paper 2, Reel 15.

(22) Alex J. Groesbeck to B. E. Hutchinson, August 7, 1951, *Arthur E. Summerfield Papers*, Box 8, Dwight D. Eisenhower Library, Abilene, Kansas.（以下 *Summerfield Papers* と略記。）

(23) Herbert Hoover to Dewey, undated, *Thomas E. Dewey Papers*, Series 10, Folder 10, Box 20, Rare Books Special Collections Preservation, Rush Rhees Library, University of Rochester, Rochester, New York.（以下 *Dewey Papers* と略記。）

(24) Dewey to Lodge, November 23, 1951, *Dewey Papers*, Series 10, Folder 6, Box 26.

(25) Dewey to Helen Adkins, May 16, 1952, *Dewey Papers*, Series 6, Folder 6, Box 39.

(26) Oral History Interview with Thomas E. Dewey, *Eisenhower Administration Project*, Oral History Research Office, Columbia University, New York, pp.2-6.

(27) Frank Carlson to John Steinke, December 28, 1951, *Frank Carlson Papers*, Box 6, Kansas State Historical Society, Topeka, Kansas.（以下 *Carlson Papers* と略記。）

(28) Rae, *The Decline and Fall of the Liberal Republicans from 1952 to the Present*, p.35; 安藤次男『アメリカ自由主義とニューディール――一九四〇年代におけるリベラル派の分裂と再編』（法律文化社、一九九〇年）、二〇二―二一八頁。

(29) Hal H. Clark to John S. Fine, May 23, 1952, *Robert A. Taft Papers*, Box 399, Manuscript Division of Library of Congress, Washington, D.C.（以下 *Taft Papers* と略記。）

(30) Dwight D. Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956* (New York: Doubleday & Company, 1963), p.130.

(31) "Statement of Senator Robert A. Taft, October 16, 1951," *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 15.

(32) "Debate between Senator Bulkley and Senator Taft, undated," *Taft Papers*, Box 1292.

(33) "Address of Senator Robert A. Taft, April 16, 1952," *Taft Papers*, Box 1446.

(34) "Address of Senator Robert A. Taft, April 27, 1948," *Taft Papers*, Box 1446.

(35) Henry Cabot Lodge, *The Storm has Many Eyes: A Personal Narrative* (New York: W. W. Norton, 1973), p.75.

(36) Harold Stassen and Marshall Houts, *Eisenhower: Turning the World toward Peace* (St. Paul: Merrill Magnus Publishing Corporation, 1990), p.7.

(37) Frank Flick to Robert A. Taft, June 1952, *Taft Papers*, Box 422.

(38) "The Future of the Republican Party, January 28, 1949," *Taft Papers*, Box 1446.

(39) Rae, *The Decline and Fall of the Liberal Republicans from 1952 to the Present,* p.44; Oral History Interview with Clifton L. Mears by Maclyn P. Burg, May 9, 1974, *Eisenhower Library Oral History Project,* Dwight D. Eisenhower Library, Abilene, Kansas, pp.46-47.

(40) Mrs. David Rees to Robert Taft, June 12, 1952, *Taft Papers*, Box 1106.

(41) Edmund Buckley to John Fine, June 12, 1952, *Taft Papers*, Box 399.

(42) Sam K. Dennis to James P. Kem, January 8, 1952, *Carlson Papers,* Box 6.

(43) Harry V. Dougherty to Robert A. Taft, June 23, 1952, *Taft Papers*, Box 399.

(44) Henry Pitcher to Frank Carlson, December 7, 1951, *Carlson Papers,* Box 6.

(45) Frank Leach to Carlson, June 25, 1952, *Carlson Papers,* Box 6.

(46) Harry V. Dougherty to John S. Fine, April 30, 1952, Political File-1952 Campaign Pennsylvania, *Taft Papers,* Box 399.

(47) "The Student in Politics," Dickinson County News, Abilene, Kansas, November 18, 1909, Daniel D. Holt (ed.) *Eisenhower: The Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1998), p.77.

(48) Diary of Dwight Eisenhower, September 25, 1951, Louis Galambos, et al. (eds.) *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 12 (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1989), p. 565.

(49) Dwight Eisenhower to Milton S. Eisenhower, May 30, 1951, Galambos, et al. (eds.) *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 12, pp.304-305.

(50) Adams to Lodge, February 6, 1952, *Lodge Papers,* Paper 1, Carton 2.

(51) Stephen E. Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President* (New York: Simon and Schuster, 1990), p.594.

(52) Oral History Interview with James Hagerty, *Eisenhower Administration Project,* n.pag.

(53) Oral History Interview with Barry Goldwater, *Eisenhower Administration Project,* pp.22-23.

(54) Eisenhower's Diary, January 14, 1949, Robert Ferrell (ed.) *The Eisenhower Diaries* (New York: W. W. Norton, 1981), p.153.

(55) Eisenhower to William Edward Robinson, March 6, 1951, *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 12, pp.97-98.

(56) Eisenhower to Julius Earl Schaffer, January 22, 1952, Galambos, et al. (eds.) *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 13 (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1989), pp.904-905.

(57) Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President,* p.247.

(58) Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* pp.8-10.

(59) Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* pp.51-52.

(60) Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* pp.193-194.

(61) Chief of Staff Diary, February 28, 1933, *Eisenhower: The Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941,* p.77.

(62) Chief of Staff Diary, November 30, 1932, *Eisenhower: The Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941,* pp. 6-7.

（63） Chief of Staff Diary, March 6, 1933, *Eisenhower: The Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941,* p.78.

（64） Chief of Staff Diary, December 9, 1933, *Eisenhower: The Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941,* p.78.

（65） Cornelius P. Cotter, “Eisenhower as Party Leader,” *Political Science Quarterly,* Volume 98, Number 2（Summer 1983）, pp.259-260.

（66） Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President,* p.259.

（67） Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* pp.4-5.

（68） Gary W. Reichard, *The Reaffirmation of Republicanism: Eisenhower and Eighty-Third Congress*（Knoxville: The University of Tennessee Press, 1975）, pp.12-13.

（69） 橋本努「クリントン政権の『福祉から就労へ』」『理戦』八四号（二〇〇六年夏）、五頁、佐々木毅『アメリカの保守とリベラル』（講談社学術文庫、一九九三年）、三八頁、George W. Bush, *A Charge to Keep: My Journey to the White House*（Harper Paperbacks, 2001）.

（70） L. Richard Guylay, “Eisenhower’s Two Presidential Campaigns, 1952 and 1956,” in Joann P. Krieg（ed.）*Dwight D. Eisenhower: Soldier, President, Statesman*（New York: Greenwood Press, 1987）, pp.22-23.

（71） Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* pp.6-7.

（72） Transcript of Recorded Interview with Thomas E. Dewey, January 22, 1965, *John Foster Dulles Oral History Project,* Seeley G. Mudd Manuscript Library, Princeton University, New Jersey.

（73） Lodge, *The Storm has Many Eyes,* p.77; Lodge to Eisenhower, August 4, 1955, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

（74） The Reminiscences of Thomas Dewey, 1966, *Eisenhower Administration Project,* p.26.

（75） Undated Document, 1952, *Lodge Papers,* Paper 1, Carton 1.

（76） Oral History Interview with Leonard W. Hall, *The Oral History Collection of the Association of Former Members of Congress,* Box 1.

（77） Oral History Interview with Thomas E. Dewey, *Eisenhower Administration Project,* p.6.

（78） Interview with United States Senator Hugh Doggett Scott. Jr., *Oral History Collection of the Association of*

Former Members of Congress, p.130.

(79) Oral History Interview with Lucius D. Clay, *Eisenhower Administration Project,* n.pag.

(80) Memorandum of Lodge, November 1963, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(81) Undated Document, 1952, *Lodge Papers,* Paper 1, Carton 1.

(82) Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President,* p.259.

(83) Lodge to Carlson, 1951, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(84) Eisenhower, *The White House Years: Mandate for Change, 1953-1956,* p.18.

(85) Lodge, *The Storm has Many Eyes,* p.91.

(86) Lodge, *The Storm has Many Eyes,* p.82.

(87) Stassen to William S. Linnell, January 21, 1952, *Harold Stassen Papers,* Box 89, Minnesota Historical Society, Saint Paul, Minnesota.（以下 *Stassen Papers* と略記。）

(88) Stassen's Confidential Memo, December 22, 1951, *Stassen Papers,* Box 75.

(89) Stassen to Dewey and Lodge, February 22, 1952, *Dewey Papers,* Series 6, Folder 28, Box 120.

(90) Stassen and Houts, *Eisenhower: Turning the World toward Peace,* p.31; Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President,* p.260.

(91) Stassen to Eisenhower, April 14, 1952, *Stassen Papers,* Box 75.

(92) Harold Edward Stassen interviewed by Alec Kirby, June 1991, *Oral History 6,* Minnesota Historical Society, Saint Paul, Minnesota.

(93) Stassen to John S. Fine, January 3, 1951, *Stassen Papers,* Box 75.

(94) Jerry Ade to Stassen, June 25, 1952, *Stassen Papers,* Box 74.

(95) Stassen to Ade, June 19, 1952, *Stassen Papers,* Box 74.

(96) Richard M. Nixon, *Six Crisis*（New York: Doubleday and Company, 1962）, pp.98-99.

(97) Expenses on Primary, 1952, *Warren Papers,* F3640: 652.

(98) Radio Talk by Governor Warren, May 11, 1952, *Warren Papers,* F3640: 655.

(99) Earl Warren, *The Memoirs of Chief Justice Earl Warren* (New York: DoubleDay, 1977), pp.379-404.

(100) Lodge to Sherman Adams, January 4, 1952, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(101) Ambrose, *Eisenhower: Soldier and President,* p.264.

(102) Stassen and Houts, *Eisenhower: Turning the World toward Peace,* pp.23-26.

(103) Thomas E. Dewey to Lodge, November 17, 1951, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 4.

(104) Ambrose, *Eisenhower,* Volume 1, p.529.

(105) "Memorandum, June 7, 1952," *Taft Papers*, Box 425.

(106) David Halberstam, *The Fiftieth* (New York: Villard Books, 1993), p.211.

(107) Eisenhower to Lodge, May 20, 1952, Louis Galambos, et al. (eds.) *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 13, p.1234.

(108) Lodge to Dwight Eisenhower, May 8, 1952, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(109) Lodge to Eisenhower, October 3, 1952, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(110) Lodge to Dwight Eisenhower, December 4, 1952, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(111) Lodge to James H. Duff, May 17, 1950, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 4.

(112) Lodge to Eisenhower, November 16, 1953, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(113) Memorandum of Lodge, December 1, 1953; Lodge to Eisenhower, November 16, 1953, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 28.

(114) Taft to Hanf, August 19, 1952, *Lodge Papers,* Paper 2, Reel 15.

(115) Eisenhower to Lodge, May 20, 1952, Louis Galambos, et al. (eds.) *The Papers of Dwight David Eisenhower: NATO and the Campaign of 1952,* Volume 13, pp.1232-1234.

(116) Ambrose, *Eisenhower,* Volume 1, pp.533-535.